

そこに 学校があった

休廃校の歴史

興津小学校 (中)

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

現代の興津小学校の原型ができていく

明治期の度重なる学校制度改正が、修道学舎の運営体制を目まぐるしく変えていった。それは「寺子屋の延長」から「公的教育機関としての学校」への成長の軌跡でもあった。明治19年の小学校令によって、尋常小学校4か年が義務制となり、同26年「興津尋常小学校」と改称。そして、同40年小学校令が改正され、義務教育期間が4年から6年に延長、尋常小学校は6年と定められた。これにより現代の興津小学校の原型ができあがっていったといえよう。この頃になると、初等教育への社会的コンセンサスや経済的条件整備が進むことで生徒数が増えていく。大正12年度には尋常科だけで71名の卒業生を送り出している。



大正12年度の尋常科・高等科の卒業生
(同13年3月撮影)



立派な門と重厚な造りの旧校舎 (昭和10年)

空が真っ赤になっちゃった

さて、昭和に入ると、興津地区にもじわじわと戦争の足音が忍び寄る。地区からも多くの人々が戦地へ赴いた。そして、太平洋戦争開戦の昭和16年、国民学校令が出され「興津国民学校」に。子どもたちの学校生活にも次第にさまざまな不自由が出てくる。特に戦況悪化に伴う影響は大きかった。「金物という金物は持って行かれた。水道の蛇口までねえ」また「当時まだ1年生か2年生じゃったけど、燃料にする木材を山から

運ばされた」という。

怖い目にもあった。辺境の漁村である興津といえど空襲と無縁ではなく、空襲警報が出された時に学校の近くの森へ逃げ、そこで2泊したこともあったと

いう。「みさき山という所にあった監視所に爆弾が落とされて、夜じゃったから空が真っ赤になっちゃった」当時まだ低学年の少年だった方の鮮明な記憶である。



戦時下。子どもたちが横目で軍人たちを見ている

雨の日は裸足で通学

この当時の子どもたちの日常にも触れておきたい。通学はもちろん徒歩で履物は「足半(あしなか)」つまり草鞋である。学校に着いたら、足半を脱ぎ、足をきれいにしてから裸足で校舎内に入った。足半すらも貴重品だったので、雨の日は裸足で歩いて登校した。そして校舎に入るときは水溜りなどで足を洗った後、足拭き板でよく拭かねばならなかった。「そうそう、茅萱で編んでもらったカッパを着て行った」と80年前の小学生は言う。また、学校のグラウンドは八幡さんの前の河川敷で、現在のグラウンドができたのは終戦後のことだと語る。もちろんプールなどない。高学年になると水泳の授業は海で行われた。渾ひとつの男子たちは海岸線を西から東へと幾度も泳いだそう。



学校の眼前に広がる「プール」
当時の子どもたちが羨ましくも思える美しいプールである

そして、戦時中の不自由をようやく乗り越えた矢先、今度は大地震に見舞われる。1946(昭和21)年12月21日午前4時19分に発生した昭和南海地震である。(次回に続く)

町のうごき

(9月30日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,038	-9		男 0	12	14	11
女	7,584	-9		女 2	13	10	8
計	14,622	-18		計 2	25	24	19
世帯数	7,870	-4		(9月中の届出)			
窪川地域		10,447人		大正地域		2,010人	
				十和地域		2,165人	